

仁和寺の家―右京区竜安寺塔の下町

わたしの京都

河野裕子

前にも書いたが、足かけ五年の東京暮らしの後、京都に帰ってきたのは昭和五十一年の晩秋であった。ひさしぶりの京都はよく言われるように夏は蒸し暑く、冬は底冷えがしてひどく寒かった。帰った当座は、みんなが京都弁を喋るのにも驚いた。こんな当たり前のことに驚くほど関東言語圏になじんでいた自分の耳に、自分でびつくりした。

世話をしてくれる人があって、右京区御室の仁和寺の近くに住むことになった。三軒長屋の真ん中の家である。これがおそろしく安普請にできていて、壁などいいかげんに塗ってあるものだから、隙間から隣の家の部屋のあかりが見える。声はもちろん筒抜けである。けれどわたしたちには住める家があるだけでなくありがたいがたかった。下に三部屋、上に二部屋があり、ベランダにでると、すぐ近くの仁和寺から鐘をつく音がきこえてくる。

下の部屋にやぐら炬燵を年中置いていて、これがわたしたちの食卓になり机になった。隣の部屋は二畳くらいの広さだっただろう。ここに子供たちのすべり台があり、近所の子もきて遊んでいた。この家は建て付けが悪いうえに日あたりも悪く、いい条件はあまりなかったけれども、幼年時代の子供たちと賑やかに暮らした家だっただけに印象がよい。この家でわたしは、

子がわれかわれが子なのかわからぬま
子を抱き湯に入り子を抱き眠る『桜森』
君を打ち子を打ち灼けるごとき掌よぎ
んさんばらんと髪とき眠る 同

のような勢いのいい歌を作って精いっぱい自分を励ましていた。

狭くて汚い家だったが、宿帳がいるくらいいろいろな人が泊まっていた。今から思え

ば、ほんとうに宿帳を作って、みんなに一筆書いてもらっておけばよかった。永田は仕事もよくしたが酒もよく飲んだ。酔っぱらっては友だちを連れてくる。酔っぱらわなくとも連れてくる。

あるとき、樋口覚を連れてきたことがある。「変な家だと思つたよ。俺が行つたとき冷蔵庫庫開けて、あら何にもはいつてないつてあなと言つただろ。ほんと、びつくりしたよ」と、会えばいまだに樋口が言うのだが、わたしには記憶がない。樋口がそう言うのだからまがいがないだろう。

昭和五十二年秋に、京都で現代短歌シンポジウムがあり、その夜は岡井隆がわが家に泊まることになった。「とても汚い家ですよ」と言うのと、「僕は蚕棚にも寝たことがあるから汚いのは馴れています」と言われ、何かほつとしたのをおぼえている。以来、蚕棚とい

うことばに出会うたびに、わたしは岡井隆を連想してしまう。

岡井隆といっしょに三枝昂之、伊藤一彦も泊まることになり、わたしの家の、いつもはやぐら炬燵が置いてある部屋はいっぱいになってしまった。また急にお客が泊まることになって、冷蔵庫を開けて困っただろうと思うのだが、うまい具合に伊藤一彦が提げてきたお土産のイワシの干物があって助かった。

その夜の話題でひとつだけ覚えていいることがある。三枝昂之、伊藤一彦、永田和宏の三人は、あい前後して歌集を出したばかりで、話題は自ずからそちらに流れていったのだが、そのうちに誰かが「あ、月水金だ」と声をあげた。それぞれの歌集の名前が『水の覇権』、『月語抄』、『黄金分割』だったからである。伊藤の『月語抄』はとにかく、三枝の『水の覇権』、永田の『黄金分割』という歌集名には、

前衛短歌の影響を色濃くのこしていた昭和五十年代初めの時代的雰囲気がある。特に「覇権」ということばの選択にそれを強く感じる。歌集名は時代を映す鏡であるが、これはその典型であろう。

子供もいることだしということで、夜ふけに三人の客人たちは二階に寝に上がったのだが、いつまでたっても話しやまない。下のわたしたちはいいのだが、三軒長屋の真ん中は両隣に気をつかう。早く寝てくれないかなと氣を揉む。永田が階段の下から、ちよつと静かにお願いますと囁くように言うと、しばらくは静かになるが、そのうちにまた誰かが喋りだす。ぼそぼそした声ではない。三人ともよく通るバリトンである。そのバリトンたちはとうとう話しやむことなく、夜があげてしまった。その夜のことを岡井隆は、

批評しぐるれ。パトグラフィアの夜明け
まで 永田和宏仁和寺の家

岡井 隆『マニエリスムの旅』

という歌にしたのだが、初めて読んだときはわからない歌だった。「パトグラフィア」は病跡学のことなのだそう。この歌の少し後にある、

京に逢ひたのしかりしをさまざまに叛
き行かむわれも彼らも 同

という歌を読み返してみても、あれから四半世紀という歳月が過ぎたのかと茫然としてしまった。あのとき自分の親ぐらいに感じていた岡井隆の齡を、三枝も伊藤も永田もわたしもみんな超えてしまった。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)